

日本の神の二面性

- ・和御魂（にぎみたま）：おだやかな働き
- ・荒御魂（あらみたま）：勇猛な荒ぶる側面

連載

刀剣の歴史と思想

第10回

酒井 利信

天地を繋ぐ剣 草薙剣

古今、霊剣あるいは宝剣といわれるもので、その知名度ということにおいて、草薙剣をしのぐものはないだろう。

御霊剣とならんで、古代二大霊剣の一つである。

古代神話のなかで作られたイメージが、後世に与えた影響ということを考えた場合でも、この霊剣の右に出るものはない。

言わずと知れた三種の神器の一つである。

しかし、この草薙剣は、非常に複雑な側面をもちつつ神話の中で語られている。この霊剣に潜む基本的な思想構造を窺うには、ヤマタノヲロチ神話と天孫降臨神話に先ずはアプローチするべきであろう。

▼草薙剣の出現と昇天

『ヤマタノヲロチ神話』

草薙剣の出現は、有名なヤマタノヲロチ神話の中で語られている。

ヤマタノヲロチ神話とは、端的に述べると、スサノヲという神が、乙女を助けるために蛇体の怪物を斬り殺し、その尾から後という草薙剣を得るという話である。

草薙剣の出自

この神話で主役を演じるスサノヲは、天石屋戸神話では、姉である天照大神のいる高天原で暴虐の限りを尽くし、そこから追放されるといった乱暴者として描写されている。しかし、ここで取り上げるヤマタノヲロチ神話では、邪神を退治する英雄神として描かれており、日本神話の中で善悪二面性をもった神として性格づけられている。

スサノヲの二面性

三種の神器

- ・八咫鏡
- ・草薙剣（天叢雲剣）
- ・八咫瓊曲玉



天上界である高天原から追放されたスサノヲは、出雲の国の肥の河の上流にある鳥髪というところに降り立つ。ここからこの神話が始まる。

以下、詳細を『古事記』にみられる記述から追っていくことにしたい。

老夫と老女と二人在りて、童女を中に置いて泣けり。爾に「汝等は誰ぞ」と問ひ賜ひき。故、其の老夫答へ言ししく、「僕は国つ神、大山津見神の子ぞ。僕が名は足名椎と謂ひ、妻の名は手名椎と謂ひ、女の名は櫛名田比売と謂ふ」とまをしき。亦「汝が哭く由は何ぞ」と問ひたまへば、答へ白言ししく、「我が女は、本より八稚女在りしを、是の高志の八俣の遠呂智、年毎に来て喫へり。今其が来べき時なり。故、泣く」とまをしき。爾に「其の形は如何」と問ひたまへば、答へ白ししく、「彼の目は赤加賀智の如くして、身一つに八頭八尾有り。亦其の身に蘿と檜櫓と生ひ、其の長は谿八谷峽八尾を度りて、其の腹を見れば、悉に常に血爛れつ」とまをしき。



出雲の国に降り立ったスサノヲは、泣き悲しむ老夫婦とクシナダヒメに出会う（『鮮斎画譜』より）

年老いた男女が若い娘を中にはさんで泣いていた。そこでスサノヲは「お前たちは誰か」と尋ねたところ、年老いた男が答えて、「私はオホヤマツミの子でアシナヅチといい、妻はテナヅチといい、娘はクシナダヒメと申します」と言った。そこでまた

「なぜ泣いているのだ」と問うと、「私どもには娘が八人いましたが、高志のヤマタノヲロチが年ごとにやってきて喰ってしまいました。今またこれがくる時になり、それで泣いているのです」と答える。スサノヲがまた「それはどんな姿か」と尋ねたのに対して、「その目は赤いほおずきのようにあり、一つの胴体に八つの頭と八つの尾があり、またその体にはコケやスギやヒノキが生え、その長さは谷を八つ、山の尾根を八つも渡るほど大きく、その腹を見ればいつも血が出て爛れています」と答えた。

この神話はいくつかの部分に分けて解釈できるが、おおよそここまでが前半部分である。

次に、以下の記述が続く。

爾に速須佐之男命、其の老夫に詔りたまひしく、「是の汝が女をば吾に奉らむや」とのりたまひしに、「恐れれども御名を覚らず」と答へ白しき。爾に答へ詔りたまひしく、「吾は天照大御神の伊呂



勢なり。故今、天より降り坐しつ」との
りたまひき。爾に足名稚手名稚神、「然
坐さば恐し。立奉らむ」と
と白しき。

スサノヲが老夫にむかつて「お前の娘をわたしに献上するか」と尋ねたところ、「恐れ多いことですが、あなたのお名前も知りませんので」と答えたところ、スサノヲは「私は、天照大神の弟である。今まさに天より降ってきたのだ」と名乗った。アシナヅチとテナヅチは、「それなら恐れ多いことです。（娘を）差し上げましょう」と申し上げた。スサノヲは、クシナダヒメとの結婚を条件に怪物退治に挑むことになる。

まずはアシナヅチとテナヅチに何度も醸した強い酒を作らせ、それを八つの酒

船に入れて用意をさせ、怪物を待ち受ける。そこへまんまとやってきたヤマタノヲロチ

は、その酒船に頭を入れて酒を飲み干し、酔って寝てしまう。以下、この続きである。

爾に速須佐之男命、其の御佩せる十拳剣を抜きて、其の蛇を切り散りたまひしかば、肥河血に交りて流れき。故、其の中の尾を切りたまひし時、御刀の刃毀けき。爾に怪しと思ほして、御刀の前以ちて刺し割きて見たまへば、都牟刈の大刀在りき。

スサノヲは身に帯びていた十拳剣を抜いて、その蛇をばらばらに斬り刻んでしまった。肥の河はその血で真っ赤になったという。その八つもある尾の中のあたりの尾を斬った時、剣の刃が欠けた。怪しいと思って、剣先で刺し割いてみると、



ヤマタノヲロチと戦うスサノヲ（神代正統「常磐草」より）



別の素晴らしい剣が出てきた①。

この件は、スサノヲの大蛇退治におけるクライマックスである。ここで特に重要なことは、後世、霊剣として名を馳せる草薙剣が出現したことである。

そして、この霊剣を考える上でさらに重要な部分が、この後に続く。

故、此の大刀を取りて、異しき物と思ほして、天照大御神に白し上げたまひき。是は草那芸の大刀なり。

そこで（スサノヲは）この剣を取り、これが普通ではない特異なもの②と思われ

たので、天照大神に申し上げて献上した。これが草薙剣である。

以上がヤマタノヲロチ神話の概要である。

この神話については、従来、これがペルセウス・アンドロメダ型であるとする説③、あるいは高祖の斬蛇剣との共通性を指摘する説④など、さまざまな立場からの解釈があるが、以下、刀剣の思想を説明するという立ち位置から、この神話を解釈してみたい。

そもそもここで蛇体の怪物として描かれているヤマタノヲロチとは何かというと、水の精霊と考えて間違いない。舞台となっ

ている出雲の国の肥の河とは現在の斐伊川のことで、この川は古来、氾濫を繰り返す暴れ川であった。氾濫すれば住居や農作物など全てを押し流してしまうこの川は、古代人にとって畏怖の対象であり、それ故に人格化さえされた。日本の古い神には、人々を助けるものばかりでなく、こういった荒ぶる神もいた。ヤマタノヲロチは、この斐伊川を象徴する水の神である。頭が八つ、尾が八つあるこの蛇体の水神は、多くの源流が集まって本流となり、これがいくつかの支流に分かれていく川の姿を表徴したものとも考えられる。この荒ぶる神は、畏怖の対象であるがために鎮められなくて

前半

ヤマタノヲロチ

= 水の精霊（斐伊川）

= 畏怖の対象

→ 人身供犠



後半

畏怖の信仰

斬る
剣（最先端文明）

新しい信仰の表徴

霊剣

天上へ



現在の斐伊川。ヤマタノオロチは斐伊川を象徴する水の神といわれる（島根県簸川郡）

はならず、そのための生贄がクシナダヒメという乙女としてこの神話の中で描かれている。荒ぶる神に対する人身供犠の風習が、

この話の背景にはある。以上が、この神話の前半部分である。

これに続く後半部分のヤマタノヲロチをスサノヲが剣で斬り殺すという描写は、この蛇神に集約される畏怖の信仰を斬り払うことを意味していると、私は理解している。ここには古い信仰と新しい文明のせめぎ合いがある。文明が進歩すれば、自然の脅威にいくらか対応することができるようになる。特に金属器の導入が、大きな影響をもたらしたことは容易に予想ができる。金属文明としての刀剣は、最先端文明の表徴である。光り輝く最新鋭の剣の前に、古い水の精霊である蛇神はもはや畏怖の対象ではなく、神話の中で斬られるべきものであった。

そして刀剣の思想ということから考えた場合、この神話で特に重要なものが、この蛇神から霊剣が出現したということである^⑤。古い信仰を断ち切った剣はさほど重視して述べられていないにもかかわらず、この蛇神から出てきた剣が非常に貴重なものとして語られているところにこの神話の特徴がある。これはこの剣が新しい信仰の表徴

となつていることを表す。それ故に、『日本書紀』に、この剣が熱田神宮で祀られていることが記されている。

後に日本刀剣思想の中で多大の影響力をもつにいたるこの草薙剣について、特に重要なことは、その出自を語るこのヤマタノヲロチ神話において、古い信仰を断ち切った結果、新しい信仰の表徴としてこの霊剣が出現したこと、さらにこれが下界である出雲に出現してすぐに天上に上げられたということである。

このことに注意して、話を次の段階に進めたい。

▼三種の神器として天より降る霊剣〜天孫降臨神話〜

草薙剣が現代において何故かくも有名かというと、三種の神器の一つとして古代から現在にまで伝えられているということが非常に大きいように思う。

三種の神器とは、歴代天皇が皇位の標識として伝えてきた、八咫鏡・草薙剣・八咫瓊曲玉の三つの宝のことである。



天皇家に伝わるこの宝器の出自は、天孫降臨神話にある。

日本神話の中での天孫降臨神話の位置づけをここで再度確認しておく、天上界の統治者である天照大神は下界をも自らの子孫に治めさせようと考えているが、下界である華原中国がひどく騒がしく不安定であったため、これを武神タケミカヅチに平定させた。これが先にみた国譲り神話である。このタケミカヅチの平定をうけて、いよいよ天照大神の子孫である天孫が下界を治めるべく降臨していくというのが、ここでの天孫降臨神話である。

『古事記』によれば、最初、天照大神（と高木の神）は、アメノオシホミミに下界に降るよう命令するが、その準備をしている最中に子が生まれたため、アメノオシホミミはその子ホノニニギを下界に降臨させることを提案する。そこで天照大神（と高木の神）はあらためてホノニニギに、命を下すのが次の描写である。

「此の豊葦原水穂国は、汝知らさむ国ぞと言依さし賜ふ。故、命の随に天降

るべし」とのりたまひき。

「豊葦原水穂国（葦原中国）はそなたが支配する国であると、（父）アメノオシホミミから委任があつたので、仰せの通りに天上から降りなさい」と仰せになった、というのである。

前段以上のような多少の経緯はあつたものの、最終的にはホノニニギが天孫として降臨していく。

いささか周辺の事柄が入り組んで記述されているためにわかりにくい感もあるが、『古事記』に記されている天孫降臨の描写を以下にあげておく。

爾に天児屋命、布刀玉命、天宇受売命、伊弉諾理度売命、玉祖命、并せて五伴緒を支加へて、天降したまひき。是に其の遠岐斯八尺の勾璫、鏡、及草那芸劍、亦常世思金神、手力男神、天石門別神を副へ賜ひて、詔りたまひしく、「此れの鏡は、専ら我が御魂として、吾が前を拝くが如伊都岐奉れ。略」とのりたまひき。

（天照大神は、降臨するホノニニギに）アメノコヤネ、フトダマ、アメノウズメ、イシコリドメ、タマノヤの五柱の神をお伴としてつけ、八尺の勾璫（八尺瓊曲玉）、鏡（八咫鏡）、および草那芸劍（草薙剣）を手渡し、さらにオモヒカネとタヂカラヲとアメノイハトワケと副えて、「この鏡を私の御魂として祀れ」と仰せになった。以上のような内容である。

天孫降臨神話については、記紀神話が編纂されてくる過程の中での政治的意図が見え隠れするなど複雑な要素が含まれており、この複雑さがここであげた『古事記』の件の内容を複雑かつわかりにくくしている。ここに含まれる他の要素については後に考察していくこととして、ここで確認したい事項を端的に記述しているものとして『日本書紀』の第九段第一ノ一書の記述を以下に挙げておく。

故、天照大神、乃ち天津彦彦火瓊杵尊に、八坂瓊の曲玉及び八咫鏡・草薙剣、三種の宝物を賜ふ。



天皇の尊貴性

←根拠

三種の神器

神話で語られている

降臨に際して、天照大神はホノニニギに八咫瓊曲玉および八咫鏡、草薙剣をお与えになった、という内容である。これが代々天皇となる者に、地上の統治者の証として受け継がれてきている。

天皇の尊貴性の根拠というものは、天上の神々、特に天照大神との関係にある。この関係性を確保しているのが三種の神器である。ホノニニギ自体は、神話上、神々の世界である天上から天照の命によって降りてきているのでその尊貴性は比較的強く認められるが、その後、皇位を代々継承していく天皇については下界での話であり、これが貴いものであるとされるには、神話上の天照との血統的な繋がりは語られるものの、なおこれを補って、三種の神器を実際に保持していること、そしてその三種の神器が天照大神から授かったものであることが神話で語られていることが重要であった。天孫降臨神話の主たるモチーフはここにあると考えてよい。このことがこの神話が政治神話といわれる所以でもある。

以上が、天孫降臨神話の概要である。

▼新たに創出された 草薙剣像

草薙剣に関する神話として、ヤマタノヲロチ神話と天孫降臨神話の内容をみてきたが、この二つの神話を概観すべく並べてみて、違和感を感じるのは私だけではないはずである。一方は古くからの信仰にかかわるものであり、他方はいわゆる政治神話である。

私が考えるにこの二つの神話は、そもそも別の宝剣についての伝承であったように思う。出雲にはヤマタノヲロチにかかわる宝剣伝説があり、これとは別に天皇家に伝わる三種の神器としての宝剣があった。ヤマタノヲロチ神話で大蛇から得られた宝剣は、『日本書紀』本文に「一書に云はく、本の名は天叢雲剣」と記されているように、元々は天叢雲剣といって三種の神器のひとつである草薙剣とは別の剣であったと私は考えている。これが勅命により記紀神話が編纂されるまでの間に、神話上、同一のものとされたのではないだろうか。ヤマタノヲロチ神話は、『古事記』なら

びに『日本書紀』に記されている。特に『日本書紀』は本文のほかに古い伝承を別伝という形で多く収録しているが、このいくつかの別伝で、大蛇退治により宝剣を獲得する描写の後に、これを天上界の天照大神に献上するという宝剣奉納の部分の記述がないものがいくつかある。これはどういうことを意味しているのだろうか。おそらくは、元からある古い伝承に、宝剣奉納の



ヤマタノヲロチ神話を現代に伝える石見神楽（島根県石見地区）

奉剣描写の欠如

湯浅泰雄の方法論



部分が後で付け加えられたということであろう。

何故こういったことが起こったのかという、それは三種の神器との関わりがあると考えて間違いない。

古代社会における天皇は、祭祀をもつて人心を掌握し、国を治めてきた司祭者である。その司祭者たる天皇が祭で使用した道具が三種の神器である。いたって信仰にかかわる問題である。天叢雲剣は、ヤマタノヲロチという古い信仰を断ち切った結果出現した霊剣であり、これは一面で新しい信仰の表徴でもある。それ故に、人々の信仰を司る司祭者たる、天皇の所持する三種

の神器としての草薙剣と、思想的に結びついていた。

そして、天皇の尊貴性を保障する三種の神器は、神話上で天孫とともに天上界から降りてこなくてはならず、その時点までにヤマタノヲロチから得られた宝剣は天上界の天照の手になくはならない。そのためにヤマタノヲロチ神話において、地上で得られた宝剣が天上の天照に献上されるという宝剣奉納の話が、後から付け加えられたと考えるのが自然であろう。

そもそもあった、ヤマタノヲロチに象徴される古い信仰を打破し、新たな信仰を表徴するような刀剣の思想と、別に古代の王

たる天皇がステータスシンボルとして所持した三種の神器としての刀剣の思想^⑥が融合し、記紀神話が成立した時点で新たな刀剣の思想を形成していたということである。同じ古代神話ではあるが、古代の中でも刀剣の思想が進化していると考えるべきであろう。

そして、新たな刀剣の思想、つまり新たな草薙剣像とは、ヤマタノヲロチ神話において宝剣が地上から天上に上げられ、また天孫降臨神話において天上から地上に降ってきているように、**霊剣と同様、天上と地上を繋ぐものとして認識されるものであった。**

天上と地上を繋ぐ霊剣



高天原（神々の世界）

ヤマタノヲロチ神話

国譲り神話

天孫降臨神話

神武東征神話

神
人

葦原中国（人間界）

神話時代

歴史時代

いかにも作られた神話といった感はないが、これがその当時の人々の精神世界を表した神話であることは間違いなく、以後この神話的イメージがこの剣の神聖性を恒久的なものにしていることもまた、事実である。

天地を繋ぐ霊剣、草薙剣は、実に不思議であり、解釈に難しい伝承が多く付きまとう霊剣である。ただ、それだけにロマンもある。

〈註〉

（1）ここでは「大刀」の表記であるが、これは刀剣をさす総称であり、この場合は刀剣のうち諸刃の剣であると考えてよい。『日本書紀』の場合、本文、別伝ともに、ヤマタノヲロチを斬った刀剣も、これから出現した刀剣も、全て「剣」の表記である。

（2）『日本書紀』には、「神しき剣なり」と記されている。

（3）従来の神話学においては、このヤマタノヲロチ神話をペルセウス・アンドロメダ型として解釈することが多い。これ

は、英雄が犠牲になろうとしている乙女を救うために、怪物を退治するというものであり、同様の型をもった神話は世界中のいたるところに見られるという。ペルセウスという英雄が海の怪物を退治してエチオピア王の娘であるアンドロメダを助けるギリシア神話に由来してこういわれている。

（4）従来、このヤマタノヲロチ神話については、『史記』にみる高祖の斬蛇剣の話との共通性が頻繁に指摘される。『日本書紀』に草薙剣について「一書に云はく、本の名は天叢雲剣。蓋し大蛇居る上に、常に雲氣有り。故以て名くるか」（ある書に、本の名は天叢雲剣とされている。これは大蛇の居る上に常に雲氣があったためにこう名付けられた）と記されているが、これは高祖が居る辺りに常に雲氣が漂っていたという『史記』の記述を想起させる。そして何より歴史に名を残す英雄が大蛇を斬ったという点で類似している。話そのものに潜在するモチーフについていろいろ違いを指摘することはできるが、話の型としての類似性は

ら日本においてヤマタノヲロチ神話が形成される過程で高祖斬蛇剣の影響を受けたことは十分に考えられる。

（5）斐伊川の上流は、古来、刀剣の材料となる非常に上質な砂鉄を産する所であり、これを採るのに川の水の流れを利用したという（後世これが、土砂を川の中に流し込み、いくつかの堰の所で沈んだ比重の重い砂鉄を採取する方法である「鉄穴流し」という形に発展する）。このためこの川の水は、砂鉄の色で赤かったという。ヤマタノヲロチの腹がいつも血が出て爛れていたという描写は、このことを表している。刀剣の材料となる砂鉄を産する川の化身がヤマタノヲロチである。ヤマタノヲロチから、剣が出現したという神話には、以上のような背景がある。

（6）時の権力者が代々（鏡と曲玉と共に）剣を継承していくことから直ちに想起されるのが、漢の皇帝に代々受け継がれた高祖の斬蛇剣である。刀剣の思想ということで考えた場合、これらは同系統の思想であるといえよう。

